

学期末、そして旅行へ

加藤 佳奈子

中国では旧暦で新年を祝うため、毎年元旦の日程が少しずつ違います。今年は2月10日が元旦になるので、中国の1月は日本でいう年末にあたり、今月に入ると年越しの支度で街はにわかに活気づいていきました。中国の大学は全寮制なので、普段寮で生活をしている学生にとって年越しは家族と過ごす数少ないチャンスです。大学では1月に学期末試験があり、それが終わると同時に皆久しぶりの我が家に戻っていきます。学生達が去った後の構内はもぬけの殻、といってもいいくらい閑散としています。学生を相手にしている個人経営の食堂やドリンクスタンド、文房具屋も年末に向けて早々に店を閉めてしまうので、帰国をしない私を含めた留学生は買い物に行くにもご飯を食べに行くにも少し遠出をしなければいけません。このような生活が春節の2月10日から元宵節と呼ばれる2週間後の25日まで続きます。

学生は2学期が始まる3月までおよそ1カ月半の休みをもらえることになっていますが、その間ずっと太原にいるのももったいないと感じたので1月の下旬に1週間、成都に旅行を試みることにしました。

太原から成都までは直通の新幹線も寝台列車もないため、今回は太原の武宿空港から飛行機で飛ぶことにしました。地図で見ると東北から西南に対角線上を移動するようなかっこうですが、実際は2時間もかからずに成都に到着しました。今年の成都是例年より暖かいらしく、1月の下旬、昼間でも太原ではダウンジャケットを着込んでいるような時期に成都ではカーディガンをはおるくらいで外出できました。

成都是中国の内陸部に位置する四川省の省都です。北京、上海、天津など中国大陸に大都市はたくさんありますが、ここは中でもかなり特殊な場所だと思います。四川省は東側以外を少数民族居住地域に囲まれていて、街を歩いても伝統的な少数民族衣装を着ている人々をちらほら見かけました。このような光景に出会い、中国が多民族国家だということに改めて気づかされます。ちなみに成都是チベット旅行の入り口でもあります。

また、成都の人々は火事で家が燃えてもテーブルを引っ張り出してきて麻雀をする、というジョークがあるくらい楽観的、と(少なくとも成都以外の地域では)考えられているようです。確かに成都には街のあちこちに茶屋と書かれた雀荘があり、老若男女が雀卓を囲んでいる姿を窓からのぞき見することができます。そんな、中国人が俗に言う中国で最もゆったりした時間が流れる街が成都です。

観光資源もとても豊富な場所です。歴史的にも地形的にも評価された世界遺産が点在し、特に九寨溝は日本でも人気が高いようです。他にもパンダを身近で見ることができるパンダ繁殖育成基地、麻辣(山椒と唐辛子のしびれる辛さ)

で有名な四川料理など、成都でしか体験できないことやものがたくさんあります。1週間の旅行では時間が足りず、成都にはまたいずれ足を運びたいと思っています。

太原に戻ってくると大学内の人々がさらに減り静まりかえっていましたが、やはり勝手を知った土地、こちらの居心地の良さを実感しているところです。まだ春節もこれからなので3月までの1ヶ月間、今度は山西省内を旅行してみたいと思います。



四川名物、火鍋。太原で食べるものよりずっと辛く、胃までしびれるようでした。後ほどスープが煮詰まって色が赤から黒に。



このように太陽の下、ゆっくりお茶を飲むスペースが成都にはあちこちにありました。



紀元前2千年前の遺跡、三星堆遺跡の博物館。不思議な造形をした仮面が多いですが、それ以外の装飾品などもとても繊細で興味深かったです。



パンダ繁殖育成基地。活動をしているパンダをみるためには早朝に出かける必要がありますが、早起きする価値はあります。